山梨新報「直言」原稿

平成十五年七月四日

「プラグマティズムということ」

山梨大学　副学長　伊藤　洋

今日、七月四日は二二七回目の合衆国独立記念日である。そしてこの数日は、世界中の「国家」中で最高年数である。つまり、米国は、近代国民国家樹立第一号だったのであり、その建国による激震は、宗主国英国は言うに及ばず、仏国などヨーロッパ全域、中南米、はては極東の小島日本にまで伝播し、旧体制を根こそぎなぎ倒していったのである。

米国東海岸に、英国からピルグリムファーザーズと呼ばれた清教徒の一団が上陸したのは、それより一五〇余年早い一六二〇年のことであった。上陸した彼らを待ち受けていた最悪のものは飢えだったから、持参したトウモロコシや小麦の種子を蒔ける良い土地を探さなくてはならなかった。そこで、幌馬車に全財産を載せて西へ向かうことになる。良い土地が見つかればそこに降りて開墾し、忌地現象によって栽培が適さなくなると、再び西へ向かって幌馬車の旅を続けた。それが生きるための実践であり、戦闘だった。他の文明で何千年もかけてやったことを数世代で行動し・実践したのである。先住民や大自然と角逐を起しながら、彼らは西へと移動していった。

そしてついに、カリフォルニア州サクラメントの小川で砂金が発見され、人々が欲望をたぎらせながら殺到した一八四八年一月二四日には、幌馬車の旅も終焉を迎えていたのである。すなわち、米国人は、実に二百余年をかけて、北米大陸を横断したのであって、その平均速度は時速七五フィートであったという。この頃までの米国を「フロンティア時代」などと言うことがある。

そもそも、フロンティア時代に生きた米国人というのはそのほとんどがヨーロッパ、それも門地で尊敬される英国からの移民であった。しかし、かれらは過酷な旅を続けている間に遺伝子を変更したらしく、先祖の英国人とは異なる行動様式を身につけたのである。そのプラグマティズム的思考規範を「プラグマティズム」という。

プラグマティズムとは、「観念の意味と真理性は、それを行動に移した結果の有効性いかんによって明らかにされるとする（『広辞苑』）」考え方である。つまり、「真理」というものがあったとして、それが真理であるか否かは、論より証拠、それによって良いことが実現されるかどうかによるという、実に現実的な思想である。

米国建国の父の一人、B・フランクリンは『自伝』の中で、「ヨーロッパでは名門は価値があるが、米国では他人のことを〝あの人はどういう身分か？〟とは聞かないで、〝あの人は何ができるか？〟と聞くのである。その人に、有用な技能があれば歓迎されるし、それをやってうまくできれば、彼を知る者から尊敬される。だが、家柄がよいというだけの理由で、何か官職か俸給を得て、社会に寄食しようとすれば、軽蔑されるであろう・」と言っている。

ところで、山梨県は、社会の変化や住民ニーズに適応する新たな行財政システムを構築するため、今年中に「行財政改革プログラム計画」を策定し、〇五年までの三年間で推進するという。そこでは、「行政の意識改革」、「県民の底力を引き出す行政推進」、「小さな県庁、大きなサービス」、「中央直結から、市町村直結の県政確立」の四つの改革を柱に、知事の「地方主権の確立」なる選挙公約の実現を目指すということを言い出した新知事に拍手喝采を送りたい。

しかし、待てよ！事プラグマティズムとは対極にある日本の、分けても山梨県のこと。例によってこれが言葉だけで終わる可能性は、少なからずある。「学識経験者」を入れた委員会の成果報告書などをきれいに印刷・配布すると、これで一件落着、それきり中身が実践されずに終わった例など枚挙にいとまが無い。

最近で言えば、「幸住県」だの、「環境首都」などというのが、その典型的例である。特に、「地方主権の確立」などというときには、地域が自立できる富の創出基盤が無くてはならないのだが、新産業創出のための施策を寡聞にして聞かない。地方分権に係る「三位一体」政策などが言われる昨今、これは何にもまして必須であるのだが・・。

政治的プロパガンダの陰に無数の負の歴史も持つ米国だが、プラグマティズムという実践的な行動精神については学ぶこと多いのである。建国記念日にあたって、他山の石ではあるが、これは私達もぜひ導入したいものの一つなのだ。